

第59回

対談・JANAなめがたしおさい金田富夫代表理事組合長

―農業と活力ある高齢化・SDGs

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

行方市のSDGsキーパーソンとの対談の第3回目になります。なめがたしおさい農業協同組合（以下、JANA）の金田富夫代表理事組合長に、農業と活力ある高齢化・SDGsについてお話を伺います。

◆グローバルな食料問題と茨城・行方の全国有数の農業

野田 茨城県は全国有数の農産地であり、人間の生存に不可欠な農業における活力ある高齢化（本連載第58回参照）は、SDGsの観点からも重要です。目標2には、「飢餓を終わらせ、食料の安定確保と栄養状態の改善を実現し、持続可能な農業を促進する」とあります。グローバルに見た場合、飢餓に直面する栄養不足人口は、約7億人と推定されます（FAO 2024）。また、農業従事者は世界人口の約四分の一にも上ります（ILO 2026等）。ローカルな視点で見た場合の農業の現状はいかがでしょうか。

金田 行方市、潮来市、神栖市、鹿嶋市を管内とする当JANAの売り上げは、県内JANAの中でもトップを誇ります。行方市の農業従事者は人口の約一割とされており、全国的に見て突出して多いといえます。首都圏消費地まで約70kmと立地も良く、温暖な環境と水はけの良い土壌はサツマイモの栽培に最適で、年間約60品目を栽培しています。

◆特産のサツマイモを軸とした魅力ある地域づくり

野田 行方市はサツマイモが有名です。JANAなめがたしおさいの特産品を生かした地域づくりへの取り組みについて教えてください。

金田 経営理念である組合員・地域への貢献やチャレンジ精神の発揮等に基づいて、さまざまな取り組みを行っています。サツマイモは、なめがた地域センターの青果物販売額の約四割を占める最重要品目です。消費者目線に立ち、実際にホクホクやしっとり焼き芋

を食べただけで、おいしいと言っていただけのものを、年間を通じて提供することが重要です。「見た目」重視ではない、生産、流通、消費に向けて意識から改革していく必要があります。単なる「取り引き」ではなく「取り組み」が重要です。

農業者の所得拡大に向けて、欧州やアジアへの輸出拡大等を通じて「焼き芋Yakiimo」を世界の共通語にできればと思っています。また、廃校となった小学校施設を生かした「なめがたファーマーズヴィレッジ」は、体験型農業テーマパークとして好評を得ています。こうした取り組みが評価され、当JANAの甘藷部会連絡会は、日本農業賞大賞、農林水産祭「天皇杯」を2017年に受賞しました。

◆JANAなめがたしおさいの活力ある高齢化・SDGsへの取り組み

野田 最後に、活力ある高齢化やSDGsへの取り組みについて教えてください。

金田 全国的に見て、農業従事者の約七割が65歳以上とされており、行方市においても高齢化に直面しています。高齢者の豊かな知見・経験をJANAの各部会の活動等を通じて、次世代に継承するこ

とが重要です。高齢者が若い気持ちを持って新しいチャレンジをする、生きがいを感じられる農業が重要です。例えば「恋のつぼみ」という商品は、甘さの中に、ほんのりと酸味を感じるおいしさが凝縮したフルーツトマトです。こだわりを持って作られたブランドトマトで、60歳を過ぎた親から、息子に伝承されています。SDGsへの取り組みも重視しています。学校給食への地元農産物の無償提供、子ども食堂、環境にやさしい生産等の多彩な取り組みを行っています。「JANAらしく殻を破る取り組みを、これからも続けていきたいと考えています。」



▲ 金田代表理事組合長と著者